

### 妊婦さんはトキソプラズマに注意

トキソプラズマ症は、トキソプラズマ (*Toxoplasma gondii*) という原虫により起こされる人畜共通感染症です。トキソプラズマはほぼ全ての温血脊椎動物（哺乳類・鳥類）に感染能を持ちますが特に猫は感染している可能性が高く、人に一度感染すると終生免疫が継続しますが、感染率は国・地域・年齢によって異なります。食肉習慣やネコの抗体保有率、衛生状態などが複雑に関連すると考えられています。世界的に見ると全人類の 1/3 以上（数十億人）が感染しているとされるなど非常に広く蔓延していることが知られています。健康者が感染した場合は、免疫系の働きにより臨床症状は出現しないか軽度の急性感染症状を経過した後で、生涯にわたり保虫者となります。したがって通常の臨床でトキソプラズマ感染が問題になることはありません。しかし、時にトキソプラズマの初感染が症状を伴い、発熱、倦怠感や筋肉痛などを訴え、理学所見で頸部リンパ節腫脹を伴い、検査成績で異形リンパ球の出現、白血球減少、肝機能障害などの伝染性単核球症様の臨床像を呈することがありこのような場合は診断に苦慮し症例報告にもなっています<sup>1)</sup>。また、特別な免疫異常を伴わない 54 歳の男性で脳膿瘍・脳炎を発症して死亡した例も報告されており<sup>2)</sup> 注意が必要です。報告者らは初感染の 10~20%が有症状であると述べており、従来考えられている以上に初感染トキソプラズマ感染症の有症状者は存在しているのかもしれない<sup>3)</sup>。初感染で注意すべきは妊娠中の女性が感染することにより起こる先天性トキソプラズマ症です。妊婦の抗体保有率は全体で 10.3%、35 歳以下の若年者で 9.6%と言われており妊娠中の女性は感染予防に留意が必要です。

妊娠中の女性がトキソプラズマに初感染した場合、トキソプラズマが胎盤を通過して胎児に垂直感染する可能性があります。胎児への感染率は妊娠末期になるほど上昇しますが、胎内感染が起こった場合の重症度は妊娠初期ほど高いといわれています。胎内感染の転帰は、不顕性から流死産まで様々であり、顕性感染の場合でもその重症度は様々です。先天性トキソプラズマ症では、水頭症、脈絡膜炎による視力障害、脳内石灰化、精神運動機能障害が 4 大徴候です。その他、リンパ節腫脹、肝機能障害、黄疸、貧血、血小板減少等が見られることもあります。これらの重篤な症状を新生児期より認める例はトキソプラズマ症に罹患した胎児の約 10%にすぎず、大部分(80~90%)で新生児期は無症状あるいは軽症状で経過します<sup>4)</sup>。しかし、不顕性感染となった場合も、眼病変などはおおよそ思春期頃まで遅発性の発症のリスクがあるといわれています。

妊婦の感染を疑う場合、妊婦の抗体検査 (IHA 法、LA 法など)、IgM 抗体検査 (ELISA 法など) や IgG アビディティ検査で、胎児の感染リスクを評価します。高リスクの場合は、羊水や胎児髄液から原虫遺伝子を PCR 法により検出することにより胎児感染診断を行い、早期から抗原虫治療を行い良好な機能予後を得たという報告もあり、感染見逃しがないように留意しないとはいけません<sup>4)</sup>。

通常は一旦感染した後に終生免疫の保虫者となりますが、AIDS などで免疫が低下すると再活性化することがあります。米国の AIDS 患者では 1-5%にトキソプラズマ脳炎がみられ

るといわれています<sup>5)</sup>。AIDS 患者におけるトキソプラズマ症の多くは既感染からの発病です。したがって、HIV 感染症が判明したらトキソプラズマ IgG 抗体の測定を行いトキソプラズマ感染の有無を把握しておくことが重要とされています<sup>5)</sup>。またトキソプラズマ抗体の無い HIV 感染者ではトキソプラズマに感染しないように気をつける必要があります。

妊婦さんやトキソプラズマ未感染の HIV 感染者はトキソプラズマに感染しないように以下のような点に注意する必要があります。生肉や十分加熱されていない肉類(内部がピンク色では危険)を摂取しないようにする。生肉を調理した後、ガーデニングや土いじりの後は念入りに手を洗う。猫を飼っている場合には猫は家の外に出さないようにする。猫の排泄物の処理は毎日行い可能であれば他の健康な人に処理してもらったり、やむを得ず自分で行う場合には処理後よく手を洗う。猫には生ものなどは与えず缶詰や市販のキャットフードを与える。などの感染予防策が必要です。

AIDS 患者のみならず、免疫抑制剤やステロイド投与患者さんにもトキソプラズマの再活性化の報告があり<sup>6)</sup>、我々の周囲の至る所に存在するこの原虫にもっと注意をはらうべきでしょう。

平成29年2月17日

#### 参考文献

- 1) 吉福 孝介ら：トキソプラズマ性頸部リンパ節炎の一例．耳鼻 2014；60；143－148．
- 2) 藤原 浩章ら：診断に苦慮したトキソプラズマ脳症の1例. *Neuro-Oncology* の進歩 2015；22；31－36．
- 3) 山本 徹：トキソプラズマ脳炎. 日内会誌 2006；95；1260－1262．
- 4) 鈴木 保宏ら：胎盤より確定診断し得た先天性トキソプラズマ症の1例 .*脳と発達* 1998；30；411－416．
- 5) 味澤 篤：HAART 時代の日和見感染症．トキソプラズマ症．*日本エイズ学会誌* 2004；6；22－23．
- 6) 加藤 哲ら：ステロイド投与中の慢性腎不全患者に発症し、サイトメガロウイルス網膜炎を併発した非 AIDS トキソプラズマ脳炎の1例．*感染症誌* 2009；83；534－537．